

K

「楓の風」らしい看護の取り組みを発信



在宅療養支援

楓の風

KAEDE TIMES 2026

在宅生活を支援するー私たちの試行錯誤

ー在宅を支える全てのみなさまへー

私たち、「楓の風」スタッフが、どのような想いで在宅支援をしているのかを、一人でも多くの方に知っていただきたい！と思い、

「楓の風」らしい取り組みをご紹介します、ニュースレターをはじめました！



Case 12

進行性の難病では、「もう動けない」と思われることが少なくありません。
しかし、身体には、**まだ引き出せる力が残っている**ことがあります。
今回ご紹介するのは、寝たきりに近い生活を送っていた神経難病の方が、
訪問リハビリを通して"立つ・歩く・声を出す"という可能性を少しずつ取り戻した事例です。

ケース

全身の緊張が強く、寝たきりに近い生活を送っていた方

60代男性。**進行性核上性麻痺**の進行により全身の筋緊張が強く、
ほぼベッド上で生活されていました。意思表示は瞬きによるYES・NOのみ。

車椅子への移乗も全介助で、足部の内反尖足が強く、**足を床につけることも困難**でした。体格もしっかりしており、**ご家族の介助負担も大きい状態**でした。



実際に実施したトレーニング内容

神経難病では、筋力低下だけでなく、**過剰な筋緊張が動きを妨げている**ことがあります。
そのため、最初から立位練習を行うのではなく、ストレッチ、筋膜リリース、
関節モビライゼーションを中心に、身体を動かしやすい状態へ整えました。

頸部や体幹の**緊張が和らぐと、端座位で足底を床につけられる**ようになり、
片手支持で座位を保てるようになりました。

その後、車椅子への移乗練習や**立ち上がり練習**へ段階的に進めました。



その後の経過と気づき

その後、**中等度の介助で立ち上がりが可能**となり、移乗時には右足を自分で踏み換えられる
ようになりました。さらに、**重度介助下で歩行練習**も行えるようになっていきます。
その姿を見た奥様は、

「立っている姿を見たのは何年ぶりでしょう。足も動くんですね」と驚かれていました。

進行性の病気であっても、残された機能を丁寧に見つけて引き出すことで、
「まだ動ける」「まだ伝えられる」という実感につながります。

楓の風のリハビリは、身体機能だけでなく、その人らしさとご家族の希望を支えることを
大切にしています。